

# 子供の遊びや生活の流れに添う音楽教育

—導入時の保育者の関わりを中心に—

On Music Education that Takes Advantage of  
the Flow of Children's Play and Daily Activities:  
Focusing on the Instructor's Role at its Introduction

武 田 道 子

Michiko TAKEDA

（平成11年10月4日受理）

## I 序論

幼稚園教育要領も平成2年の施行からそろそろ10年を迎えようとしている。環境による教育、こどもの自主的・主体的な活動など、音楽教育の立場から眺めてみると、現場にあってはその取り扱いについて翻弄されてきたかのような観が実在するのである。

つまり、音楽教育は一斉・設定保育だという解釈で、音楽の苦手な保育者は全くといって良い程にこどもへの音楽的関わりを放棄してしまっている現状が見られるのである。一方、今なお強く技術向上を目指すいわゆる一斉的な音楽教育が行なわれている現状もあるのである。

筆者は、これまで子供の遊びや生活の中で自然に発生する音楽的行動について研究を進めてきた。その過程で、幼稚園教育要領の表現の内容にある「音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単な楽器を使ったりすることを楽しむ。」という体験が本当になされているのかということに疑問を感じたのである。この体験は、子供の自主的・主体的活動を待つという単純な姿勢の中だけではなかなか生れにくかったと言わざるを得ない。

歌を歌う喜び、楽器を弾くことの楽しみを体験出来ないということは、子供から“楽しさを味わう自由”を奪ったに等しい。

本論では、子供の遊びや生活の流れを生かした本当の意味での自主的・主体的な音楽活動とは何か、そしてその楽しさを味わわせる保育者の関わりとは何であるかを追及しようとするものである。

方法的には、音楽遊びの誘発を促す事例（子供の遊びに結び、子供の主体的な活動への保育者の働きかけの事例）を分析～考察する。

事例は、1997年から1999年の5月～6月と9月の教育実習期間に実験者＝筆者が参観中に参画・蒐集したものである。

なお、筆者は一参観者の立場である。自由遊び時に保育者の保育を妨げるような配慮の下に、筆者に自らかかわってきた子供（4歳児を中心）のみを対象としての実験である。

つまり、ここでの実験は、音楽遊びの極く初期の段階～その導入部分を中心である。

しかし、この導入があれば、以降この種子を開花にまで導く手順はやさしい。しかも、この

導入は子供の主体的活動に結ばれた楽しい体験から出発したものであるだけに、本当の意味の音楽教育として結実するのではないかと確信するものである。

以上、この誘発から開花までの道筋を明らかにすることで、自由遊びの中での保育者のかかわりについて考究していく。

## II 本論～「実験事例と考察」

### 1. 遊びに結んで

(1) 事例の主題「ねんどあそび」(参考楽譜(1) P. 318参照)

#### \*遊びの発生要因

N子が3輪車に乗って、段差のある坂で立往生をしている。側にいた筆者に「ねえ、押して」と助けを求めてくる。私は「足を地面に付けて踏ん張ってごらん」というと、N子は試みるが失敗。押してあげると「これあげる」と手に握っていた粘土を半分にして私にくれる。不自然なハンドルの握り方をしていた原因はこれであった。わたしは、「あら ありがとう。一緒に粘土で何か作ろう」と誘った。

N子は先に立って、園庭の古タイヤを利用して作った椅子に私を連れていった。

#### \*展開

先ず私は「えーと、何を作ろうかな」と言いながら、“ころころころころ粘土 くねくねくねくね粘土 直子ちゃんの‘こ’の字が出来ちゃった。”と歌いながら、タイヤの上に‘こ’の字の粘土を置いた。そして「次は直子ちゃんの番よ。何を作る?」と言う私の問に「直子、3ならできる」。すかさず、私は歌で応援をした。“ころころころころ粘土 によろによろによろ粘土 数字の3ができた”～私の歌に誘われてにこにこしながら‘3’を作り上げた。すぐに、N子の口から歌がこぼれた。それからかわりばんこに“によろによろへびさん”・“かわいいうさちゃん”を作って遊んだ。N子は、もうすっかり歌を覚え、歌と粘土をこねるリズムを楽しみながら粘土遊びに興じた。

その後、N子が再度兎を作ったので、私も兎を作り、二人でピョン太君とピョン子ちゃんと名前を付け、劇遊びに移っていった。

#### \*発展への見通し

・N子との楽しかった粘土遊びを、クイズ形式で‘N子の作ったもの、私の作ったもの’を、歌いながら他の子供たちに紹介する。「僕も作れる」～「私も出来る」の声が出てくるであろう。

・劇遊びでは、粘土そのもので遊ぶより、被りものを作ったりペープサートで遊んだりの方が盛り上がるだろう。造形的表現活動への発展が考えられる。

#### \*考察

・もし、歌なしの粘土遊びであったとしたら15分も続かなかったであろうと思う。N子の歌と粘土をこねる動き、そしてその心地良さに浸っている表情からこの事が伺える。歌によってイメージ豊かな表現と遊びへの集中力が増したということが出来よう。

・さらに、場所の設定(N子が決めた場所である。)が、非常に良かったのではなかろうか。つまり、ここは園庭の裏側に位置しており、大勢の子供の出入りが少ない場所であった。その為、誰にも邪魔されずにしかも他の事に目を奪われることもなく、2人だけで粘土遊びの楽しさを共有出来たのだと思う。

・教材曲は、粘土をこねて遊びながら歌えるよう作られたものである。擬態・擬音のことばはもちろんその時に思い描いたイメージに合わせて言葉を入れ替えるだけである。現にN子の口から「ペタペタ」・「トントン」等、実際に聞こえる音で表現する場面も見られたのである。遊びの発展に結ぶ教材は、この様な要素が必要であることがわかった。

・筆者は、子供との楽しさの共有、そして遊びの始めから終わりまで通して歌での援助を加えている。この歌の援助なしでは、この遊びも成立しなかったであろう。

## (2) 事例の主題「かわいいな」(参考楽譜(1) P.40参照)

### \*遊びの発生要因

中2階のあるコーナーで、女兒2人と男児2人が、それぞればらばらにいわゆる平行遊びをしている。このコーナーは、壁や道具箱などで3方向が囲まれていて落ち着いた場所になっている。筆者は座り込んで道具箱と道具箱の間から、中の子供たちの様子を眺めている。

まもなくして、一人の男児がプラスチックのようなもので出来ている果物やケーキを、道具箱の間から私に手渡してきた。早速私は、「あらおいしそう パクパクパク」と、おいしそうに食べる真似をした。すると、次ぎ次ぎにいろいろな御馳走が運ばれてきた。

その様子を見ていた女兒が、中2階にあるままごと道具の中から木製のお皿や茶碗を持って、私の所にやってきた。私は「あら ありがとう。ではこのケーキはこのお皿にのせて頂きましょう」～「本当においしかったわ ごちそうさま」というやりとりがあった。

そのうち、女兒が外に回ってきて、私の手を取りコーナーの中に招き入れた。そして、うさぎのぬいぐるみを私に見せた。

### \*展開

私は、うさぎのぬいぐるみを受け取ると優しく撫でながら“ピョンピョンうさちゃん かわいいな”と歌ってから、女兒にぬいぐるみを手渡した。その子は、さっきよりもっともっと大事そうにぬいぐるみを抱っこした。

この歌を聞いて、もう一人の男児が熊のぬいぐるみを持ってきて私に手渡した。わたしは同じように“モコモコくまちゃん かわいいね”と熊の頭を撫でながら歌った。そして男児に熊のぬいぐるみを手渡すと優しく抱っこした。

そばにいた残りの男児と女兒も狸と象のぬいぐるみを持ってきて、私が歌を歌うことを催促した。それぞれ“ポンポコたぬき かわいいね”～“大きなぞうさん かわいいね”～と心から‘かわいい かわいい’という表情で歌ってから、ぬいぐるみを一人ずつ手渡していった。

すると驚いたことに、コーナーの外でブロック遊びをしていた男児が、別のぬいぐるみを持って私に寄ってきたのである。同様に歌ってあげると満足したようにぬいぐるみを抱いた。

それまでは別々な遊びをしていた子供たちが、ぬいぐるみを寝かせたり抱っこしたりして、共同のおうちごっこの遊びを展開していったのである。

### \*発展への見通し

・このまま歌遊びで終って良いと思う。更に、いろいろな場面で優しい気持で他の生き物に対して接することが出来るよう見守っていきたい。

・ここでの特記すべき出来事は、遊びの発展にあったと思う。単なる平行遊びから、共同の遊びへ展開したことである。音楽の持つ力を感じずにはいられない。

#### \*考察

・場所は、4歳児の教室にあり、中2階の上と下を自由に往来でき、しかも三方が黒板や壁、そして道具箱等で囲まれている。数人で遊ぶのにもってこいの広さである。この日は、空いているもう一方の入口にもダンボール作りのドアが置かれてあった。私は、そのドアを通して招き入れられたのである。このような場所であったから、歌遊びも生れたのだと思う。

・単なるおもちゃでしかなかったぬいぐるみに、歌が入ったことにより大事そうに抱え優しい気持ちを投影させて、その表情もやわらかく、本当に生きた動物に接するようであった。また、ぬいぐるみを寝かせる時も、ハンカチを掛布団の代わりにしていた。男児は、女児の様子を見ながらそばにある布をかけたりして、実に活発な動きをしていた。

優しい気持は、さらに男児までが女児の真似をして、スカートを履くという微笑ましい光景を見るまでにいたったのである。

・教材曲は、落ち着いた優しい気持ちにさせる下降の旋律線で、簡単な1楽節でまとめられている。歌詞かえが容易であり、端的にそのものを歌い込むことができる特性を持っている。

・筆者の歌いかけやその仕草また表情が、ぬいぐるみに命を与える働きをしている。つまり、優しさや思いやりの心を育てるためのこの教材の扱いについては、保育者の表現力豊かな関わりが大きな鍵になっているということである。

### (3) 事例の主題「ちょうちょう」(参考楽譜(1) P. 576参照)

#### \*遊びの発生要因

実習生が子供の腕に紐を回し背中にちょうちょうの羽を付けてあげていた。色とりどりのセロハン用紙などを使ってとても大きく美しい羽である。

羽を付けてもらった一人の女児が嬉しそうに飛び回りながら、筆者に見せにきた。

#### \*展開

わたしは「まあ かわいいちょうちょうさん！」と歓声をあげながら、“ちょうちょう ちょうちょう 菜のはにとまれ〜”と身体を揺らし羽をはばたかせながら歌った。女児もちょうちょうになりきって、両手をはばたかせながら一緒に口ずさんでいる。

私は、両手でお花を作り、ちょうちょうになった女児に向って揺らしながらしゃがんだ。すると、私の周りを嬉しそうに飛び回った。

#### \*発展への見通し

・もし、筆者であつたら次の様に発展させたい。

ちょうちょうの大好きなお花を子供たちといっぱい作る。そして、ちょうちょう役とお花役に分かれて、歌に合わせて遊ぶ。歌の最後の所でちょうちょうがお花にとまり、とまられたお花が今度はちょうちょう役と交代する。遊びが盛り上がった所で、私はきっとピアノで応援するだろう。

・更に、お花を想定して楽器を選び、フレーズ毎の分担奏を楽しませたい。

ちょうちょうが止ってくれるようにきれいな音色で好きないろいろな楽器を鳴らすのである。

### \* 考察

- ・場所は教室内であり、動き回るには格好な広がりがある。
- ・ちょうちょうの羽を付けてもらった事で、そのものになりきれ、「ちょうちょう」の歌遊びも自然に受け入れられたのであろう。歌と踊りを伴って楽しさが倍加されたと思われる。この子のとてもきれいな歌声と優しい表情は、本当に印象的であり、忘れることが出来ない。
- ・教材曲は、子供が知っている歌であり、イメージが捉えやすい。遊びをつなげるにはいくらか長いような気もした。しかし、筆者の歌やお花の応援があったからこそ、具体的なイメージが広がり遊びも成り立ったのであろうと思う。

以上、遊びの流れに結ぶ3事例への考察では、子供の遊びの流れを生かしつつ、そのタイミングを捉らえての保育者の援助がいかに大切であるかということがわかる。歌の応援だけで、子供の遊びが輝き出すのである。つまり音楽教育のねらいである「心を育てる保育」が達成できるのである。

## 2. 生活に結んで

### (1) 事例の主題「はなかみしゅん」(参考楽譜(1) P.225参照)

#### \* 遊びの発生要因

2人の女兒が、モールや折り紙を使って何やら輪にしたものを作っている。色とりどりのモールと折り紙を惜しげもなく使い、飽きもせず同じ形のものをいくつも作っている。

そのことに筆者は目を奪われ、「何を作っているの?」と思わず声をかけてしまった。「輪投げを作ってるの」と女兒。「これでどうやって遊ぶの?」と私。「おうちに持って行って輪投げをするの」と女兒。そして、また同じものを作り始めた。

そこで私は「輪投げをやってみない」といって、箱に穴をあけてそこにサインペンをポールのように立て、輪投げ遊びの小道具を作った。早速、3人で輪投げ遊びを楽しんだ。

#### \* 展開

3人での遊びに入ってまもなく一人の女兒が鼻水を出していることに気づいた。

すぐに私は、その子に向かって“はなかみシュン じょうずにシュン かんた紙なら籠の中へポイ”と歌いながら、鼻かみを促した。その子は、すぐポケットからティッシュペーパーを取り出した。そこでまた私は“はなかみシュン じょうずにシュン かんたさっぱりしてこっち向いてウフン”と歌い、その子の顔を撫でた。

その時、もう一人の女兒の目を見張るような不思議そうな顔が、私の目の前にあった。

#### \* 発展への見通し

今回はこの2人の子供だけであったが、この歌が契機となって、はなかみもその後始末もかわいらしい生活習慣の一つとして根づいてくれればと思っている。

#### \* 考察

・場所は、教室の中の作業コーナーである。道具箱には折り紙やモールやはさみ、そして糊など、何時でもすぐに使えるようになっている。床にはジュウタンが敷かれ、落ち着いた気持で、座って作業が出来る環境である。同じ場所で、別の子供が絵を描いていた。

- ・2人は輪投げの道具を作っているだけで、それを使って遊ぶというところまではいって

いなかった。本格的な輪投げ遊びというより、ポールに手作りの輪をただ通して遊ぶだけであつたのである。しかし私に加わることによって、3人で顔を合わせて笑う機会が多く出来た。

・鼻かみの動作を促す歌は、その子自身にとっても心地好かつた様で、にこにこしながら、また照れながらも嬉しそうであつた。更にその子以上に、側にいたもう一人の女兒がこの歌に聞き入り、歌い終わるまで私から目を離さなかつた。思いがけず歌に触れたという印象であつた。用事があつて、私がある場所を離れなければならなくなつた時、その子が私の手を握って「すぐ返ってきてくれる？」と約束させられたのであつた。

## (2) 事例の主題「おへそ」(参考楽譜(1) P.174参照)

### \*遊びの発生要因

6月といつてもこの日は大変暖かくむしろ暑いくらいであつた。子供たちは待ち切れずに水遊びを始め、そのうち裸になりだした。子供たちの表情は嬉しきでいっぱいだ。その後、服を着替えて教室に戻つてきた。一人の男児が私の所へやってきた時、シャツの下からおへそが見えていた。

### \*展開

それを見て、私が“おへその中には何がある ピッピッ おへその中にはごまがある ドンドン〜”とその子のおへそを指差しながら歌うと、にこにこしてもっとよく見えるようにおへそを出してきた。その子に対する私の歌が終るか終らないうちに、4人のおへそが目の前に並んだのには、私もびっくりした。

一人ずつ、歌いながら「おへそはとても大事なところだからしっかりしまっておこうね。」と、順番に服を下げていった。

### \*発展への見通し

・これを契機に、子供たちのおへそ〜健康への関心に一層配慮する。  
・この教材曲は、ピアノの伴奏の中にその楽しさを倍加させる曲趣が刻み込まれている。大変リズムカルでつい身体が動いてしまう様な伴奏である。私はいろいろな機会を捉えて歌いながらピアノを弾こうと思う。その過程の中で子供がピアノの周りに集ってくれば、一人一人の顔を見つめながら何回も弾き歌いをしたい。やがて、メロディーを覚えて歌い出す子が出てくるまで、チャンスを捉らえて弾き歌いを続ける。

・さてここからは楽器遊びへの発展である。

楽しさを倍増するために歌を覚える過程で、“ピッピッ”や“ドンドン”の部分に合う音(例えばおもちゃのトンカチまた太鼓など)を入れて盛り上げる。

更に、ほかの部分にいろいろの楽器を入れて遊ぶ。a・a'・b・a'の形式を生かして楽器で素朴な配色をする。例えば、a〜a'の部分は“レララ”の音型(オスティナート)で鉄琴または鍵盤ハーモニカを、bの部分はウッドブロックなどを入れてみると面白くなるであろう。簡単な楽器遊びであるので、子供たちはすぐに楽しく遊べると思う。

### \*考察

・場所は教室の入口近くである。ちょうど同じ水遊びをしていた子供たちがかたまっていた。子供たちにとって私の歌は、水遊びを十分楽しんだ後のおまけだったのかもしれない。  
・この曲のもつ“ピッピッ”“ドンドン”の擬音が、とても気に入つたようでこの部分がく

るとにこにこが増してくるようだ。特に、私が指をユーモラスに動かすので、身体をくねくねさせながら聞き入っていた。

・実習中はお帰りの時にみんなが集って遊び歌的なものを歌ったのを聞くくらいで、日常の保育の中で、私は子供たちが歌を歌う場面に出会ったことがない。この時も、私の歌う歌を聞きながら楽しんだが、子供たちが一緒に歌うということはないままであった。どうしたらよいであろうか。保育の担当者の猛省を促したい。

### (3) 事例の主題「おやつ」(実験者による即興題材)

#### \*遊びの発生要因

砂場で数人の子供が遊んでいた。実習生のおやつのお知らせに、さっと立ち上がって教室に戻っていった。実習生は他の場所にいる子供たちにも知らせる為、砂場を離れて行った。

さてそこに、実習生の声が全然耳に入らないのか、まだ遊びに熱中していつまでも砂場を離れない子が2人残っていた。他の友達が「おやつだよ」と知らせても知らないふりをしている。

#### \*展開

そこで私は、即興で「おやつの歌」を歌ってみることにした。

“おやつだよ おやつだよったら おやつだよ 今日のおやつはねほんとにおいしいよ はーやく食べたいなあ 食べたい食べたい食ーべたい”～今まで反応がなかった2人が同時に私の顔を見た。「変なの」と言う顔をしたので、私はかまわずもう1度歌いながら、スキップをしてその場を立ち去った。すると、2人は立ち上がり教室に向かって駆け出したのである。

教室に着いた2人は手を洗い、何事もなかったように友達とおやつに向っていた。

#### \*発展への見通し

いろいろな生活場面での保育者による即興的な歌いかけの試みである。この様な経験の積み重ねにより、やがては子供による生気に溢れた即興遊びへの展開が期待できるのではないかと思う。

#### \*考察

・砂場という場所で、しかもみんなはおやつに呼ばれて教室に立ち去った後である。言葉で促しても腰を上げなかった2人の男児が、思いがけない歌の出現にあっけにとられ、極く自然な形で遊びにふん切りをつけたのかもしれない。

・教材は、筆者の即興による歌である。これによって、子供が自分自身の意志でみんなと一緒にのおやつに参加することが出来た。これは、言うなれば音楽の用的な機能発現の一例でもある。

その要点をまとめると次のようになる。

その1 音楽の生活化の本姿は、先ず歌うたのしき、そして醸し出される身体の動きの心地よさの中で望ましい行動に結ばれること

その2 生活に結んだいろいろな教材の用意

その3 保育者のタイミングのよい即興の関わり、拍の流れにのった動きや優しい表情の中での表現力

・関連して

「おやつ音楽」・「お帰りの音楽」等々、単に条件反射的反応への合図に終止しかねない音楽に対する警戒と配慮、そしてそれへの具体的な指導のくふう

3事例とも、保育の場では“おはなが出てるよ”・“おへそしまおうね”・“おやつだよ あつまれ”の一言で、対応してしまいがちである。その言葉がけの代わりに歌を活用したのである。コミュニケーション手段としての言葉と音楽の分離がはじまる3歳児、そして明確に自己表現手段としての言葉と音楽が分離する4歳児にとって、歌による言葉表現は発達的にも叶ったものであると思う。

### 3. 音楽遊びに結んで

#### (1) 事例の主題「自己紹介の歌」(参考楽譜① P. 55参照)

##### \*遊びの発生要因

教室の出入り口が続くベランダで、保育参観をしていた筆者に一人の女兒が話しかけてきた。「誰のお母さん?」~「お兄さんとお姉さん先生の先生よ」~「どこから来たの?」~「大学から来たのよ」~「うーん」などのようなやりとりがあった。

##### \*展開

その子が私から離れなかったので「私の名前教えてあげるね」といって“みかんのみチーズのち こりのこ 全部合わせてみ ち こ 私の名前はみ ち こ 宜しくね”と表情たっぷりに動きを付けながら、歌って聞かせた。

そしてすかさず「あやかちゃんの歌も出来るよ」と言って、すぐに“アイスクリームのあ やくそくのや かわいいのか 全部合わせてあ や か 私の名前はあ や か 宜しくね”と歌ってからあやかちゃんと握手をした。

その後あやかちゃんは私の前からいなくなり、まもなく3人の友達を連れてきた。

他の友達の歌も歌ってもらいたかったのである。「この子はまゆちゃん」とあやかちゃんが私に紹介した。すると、周りの子も私に胸の名札が見えるようにしている。歌ってもらった子がまた別の子供を連れてきて、結局私の周りに男児も合わせて10人ほどの輪が出来た。

途中からは、「さのつくもの?」「とのつくもの?」「しのつくもの?」等、子供たちと話し合いをしながらの自己紹介遊びになっていった。

##### \*発展への見通し

事例のように、言葉遊びを楽しみながら少しずつクラス全員の子供に対して扱おうとよいであろう。さらに、入園式など行事への関連も考えられる。

##### \*考察

・場所は教室から外へ続くベランダで、そこには丸い机と椅子が4~5脚置いてあった。私は、その椅子にかけて教室の中の実習生の様子を参観していたのであった。ぐるっと輪になっての歌遊びは、この丸テーブルをはさんでの展開であった。言葉遊びと順番を待っての自己紹介遊びでは、この丸テーブルが大きな役割を果たしていたような気がする。

・本教材は、「自己紹介の歌」であり、当然自分をアピールするために作られたものである。自分の名前が素敵に飾られて歌となつてとび出してくる。自分だけの歌、そして友達の歌でもある。あやかちゃんや他の子供が自分の歌が終つた後、別の友達を連れてきたこともその楽しさを伝えたいという証拠であろう。子供たちの微笑みの表情に嬉しさとちょぴり



照れた様な心地よさが滲みでているような気がした。

- ・言葉をいろいろ使えるようになるこの時期の子供たちにとって格好の教材である。

この扱いについては、子供たちの言葉集めを取り入れての歌詞替え・リズムの工夫など、最初のうちは保育者のにこにことした表情たっぷりな歌での援助が必要であろう。特に、「まゆ」「じゅん」「だいすけ」等、名前のリズムの違いを歌い分けるのは、保育者の援助無しには成り立たないのである。

## (2) 事例の主題「すみれとたんぽぽ」(参考楽譜(2) P. 105参照)

### \*遊びの発生要因

教室の中で、実習生と女兒2人が、それぞれトライアングルと鈴とカスタネットを持って遊んでいた。私は、どの様な展開があるのかとじっと見ていると、ただ好きなように打ちならしているだけであった。そこで、思わず仲間入りがしたくなった。

このクラス名はすみれ組であり、隣のクラスがたんぽぽ組であることを活用して「すみれ」と「たんぽぽ」に分れて、楽器遊びに発展させようと考えたからである。

### \*展開

教材の歌詞は“すみれのお花が咲きました たんぽぽの花も咲きました。 すみれとたんぽぽ ポ ポ ”～である。この歌を使い、鈴を持つ子供はすみれ組、カスタネットの子はたんぽぽ組、トライアングルを持っていた実習生はすみれとたんぽぽに声をかける役ということにした。

第1フレーズの‘咲きました’の所を3つ打ちのリズムで鈴、第2フレーズの‘咲きました’の所はこれも3つ打ちでカスタネット、第3フレーズの‘ポ ポ ポ’は鈴とカスタネット一緒に3つ打ちというように分担した。子供の分担以外の所は、実習生のトライアングルで呼びかけることにした。私の手拍子の動きに合わせてすぐに遊ぶことが出来た。

更に、実習生のトライアングルは、第1・第2フレーズの子供が3つ打ちをする所にトレモロ奏を、第3フレーズの最後は子供と同じ様に3つ打ちを加える事にした。

少しずつ音楽的にまとまってくると、‘もう1回!’の子供の声が聞こえた。更に「今度わたし鈴やりたい」と言うことで、楽器を交代しながら遊びが盛り上がった。

### \*発展への見通し

- ・最終的に7つ打ちのリズムパターンを含む合奏遊びまで発展したのであるが、もし近くに他の子供でもいたとしたら、楽器の数を増やすことが出来たと思う。そうすることで、友達との音遊びの楽しさがさらに倍増したであろう。

- ・ここでは、実習生を含めて3人であったので、その後の発展として1対2 また1対1での楽器によるリズム問答も可能である。多様なリズムを保育者が示してやることで、その面白さに浸らせ即興遊びも盛り上がることであろう。

### \*考察

- ・展開の過程は、極めて自然で楽しい合奏遊びとして成功したように思う。

その要因を次の様におさえることが出来よう。

題材・クラス名・分担楽器の役柄などの相関、簡易な原曲の旋律構成・リズム構成から導かれる配色の面白さなど

- ・特に、分担楽器の役柄～それへの納得こそが指導上重要である。

## (3) 事例の主題「ありさんのおはなし」(参考楽譜(1) P. 479参照)

## \*遊びの発生要因

5歳児女児が3人でかたまって、ピアノを弾いていた。“ねこふんじゃった”を含め、ピアノのお稽古で習った曲であろうか、交代しながら楽しんでいた。筆者が子供たちの演奏に聞き入っていると、子供たちは私をかなり意識しながら競い合って弾いているようであった。

そこで「私も入れて!」と言うと、一人の子が「うん いいよね」と友達の顔を見て頷いた。

## \*展開

私の弾く順番が来たので“ありさんのおはなし”を弾くことにした。一人の子が「私の歌知ってるよ」と言った。「ああ よかった」と私はいいながら、すぐに明るい声で弾き歌いをした。2番まで、一人一人の顔を見つめながら、3拍子の軽やかさを伝えられるよう留意しながらの弾き歌いを心掛けた。

この楽しさを、3人の子が感じ取ってくれたのであろう。すぐの交代を忘れ、私の次ぎの誘いに乗ってきた。

ピアノの右手伴奏部に現われる各フレーズ最終小節の装飾的擬声音(F音)を子供に分担させるというものである。始めに、私が“ありさんのお話きいたかね ピッピッ〜”というように入れるのよ」と念を押すと、3人が並んで私の弾き歌いに合わせて1フレーズ毎に交代で“ピッピッ”を入れた。待ち構えていて、リズムカルに巧く入れられたことがとても嬉しかったらしい。

1度弾き終わったところで、一人の子供が素晴らしい発見をした。「ここにも同じ音があるよ」と1オクターブ上のF音を弾いたのである。すると他の子も「ここにも」と言いながら、低音部のF音を弾いた。

それからは、子供のリードで遊びが続いた。「私はこっちで弾く」〜「わたしはこっち」と言いながら、私を挟んで両脇に分れたのである。そしてこの遊びは、1回で終わらなかった。つまり、3人で交代しながら、ひとりひとりが鍵盤上にあるすべてのF音を弾き終るまで続いたのである。

子供たちの遊びの波にのって、2人組になったの手合わせ遊びをというところまで続けたかったが、クラスの保育の流れの中でやむなく打ち切らざるをえなかった。

## \*発展への見通し

次の様な展開を考えていたのである。

- ・第1段階〜両手の人差し指をありの触覚に見たてる。

3拍子のリズムにのって、‘タンチョンチョン’のタンは手拍子、チョンチョンは自分の両手の人差し指を打ち合せる。さらに先程遊んだ‘ピッピッ’は、友達の両手人差し指の触覚と自分の両手人差し指の触覚を打ち合せる。

- ・第2段階〜手合わせ遊びを楽しんだ後に‘ピッピッ’に合う楽器、さらに‘タンチョンチョン’の3拍子を飾る楽器の選択ということになる。低〜高〜高 低〜高〜高の軽快なリズムの表現が可能なものを選ぶ。

- ・楽しい軽快な合奏遊びの開幕となる。

### \* 考察

・各教室に1台ずつピアノが置かれている。子供たちは何時でも自由に弾くことが出来る。

時々、子供がピアノを弾いている場面に出会う。良く聞く曲が、“ねこふんじゃった”である。子供の弾き方を観察していると、とにかくテンポがだんだん速くなっていく傾向がある。今回も競い合って弾くうちに、テンポや曲想表現といった音楽的内容からは程遠くなっていく感じであった。

・この日の主教材「ありさんのおはなし」は、大変リズムカルな3拍子の曲である。特に、ピアノ伴奏に現われるフレーズの区切りが明快で、子供に受け入れられやすくしかも1音で統一されている。そこがこの様な音楽遊びの展開に結んだねらいめになったのである。

・筆者によるピアノ伴奏と歌によって、テンポや曲想が遊びを通して貫かれていた。この事が、子供たちの音楽的感性を刺激したのだと考えられる。

・この事例は、5歳児であった。子供たちは、結局鍵盤上のF音をすべてクリアーしたのであるが、この事は筆者にとって驚きであった。大人であれば、1回やれば同じことと思うからである。かなり長い時間の集中力の持続そして遊びの工夫など、5歳児という発達的特徴と教材曲のもつ面白さに負うところが大きかったと思う。

以上、音楽遊びに結ぶ3つの事例では、子供自身が音楽のもつ面白さ・楽しさを享受することによって、さらに意欲的な表現の育ちが不動のものになることを痛感した。

さらに、教材選択への配慮も楽しい遊びの為に大切な要因となっていることを特記したい。

## III 結論

本研究は、自由遊びの流れの中で子供と共に遊び込んだ保育の実例事例を基に、音楽遊びへの方法論～その導入時の保育者の関わりについて精査しようとしたものであった。

そして、今回の実験・調査に関わる目立った環境条件としては、次の事項がおさえられ、テーマ究明の視点に照らして一応は格好のものであったと考えられる。

\* 遊びへの媒介となる用具・教便物～例えば粘土やぬいぐるみ、楽器などの活用

\* 遊びや動きを誘発する多様な用的要素を含み持つ教材曲の用意

なお、このうち後者のいうなれば“教材の調理”～保育のくふうに関わる場所では、特にユニークな扱いへの着想に見合うべく、次の様な具体面の検討が当然のこと大切である。

新鮮にして魅力的な題材・曲想のものであることを前提にして――

・題材・歌詞への着眼

遊び・生活に直結するもの

擬声・擬音・リズムカルな言葉・問答～その他描写的な要素などを含むもの

・曲の構成への着眼

簡易なリズム構成のもの

無理のない音域で簡易な旋律構成のもの

・統合的活動への着眼

動きに発展しやすいもの

楽器遊びに展開しやすいもの

また、実験事例「3 音楽遊びに結んで」に表われた音楽的色彩がほんのちょっとだけほの

みえてきた3例では、以降発達に即して選曲にそれなりの配慮が必要である。つまり教材曲がもつ美的

・質的内容の側面にも徐々に着眼してということである。歌遊びと楽器遊びの統合などもだんだんにより積極的に行なわれてくることになるだろう。

以上、環境の視点から、子供が育つ“教材曲の用意”に向けた考察である。これが第1点。

第2点は、教師自身が幼児の素朴な遊びにどう関わって歌遊び・楽器（手拍子・手合わせなど身体楽器を含む）遊びを構成していくかの視点で、今回の研究の主軸をなす側面である。保育者の力量～その全域が問われるところであって、狭い意味合いでのいわゆる保育技術の問題として片付けられるものではない。

すなわち、私たちの一日一日の実践は、「あくまでも子供一人一人の全人的・円満な育ちを願う姿勢の中で」を不動の前提として、音楽的に微笑ましい育ちを指向するということである。

要するに問題は、挙げて保育者の研鑽・資質ということに帰結・集約するのであるが、今回は特に主題に見合うべく焦点化されたものとして、次の様な具体の指摘となったのである。

教師の歌う力・ひく力（楽器遊びの編成楽器の一切を含む）・ひき歌いの力・作る力（発達に留意した初歩の編曲技法を含む）など実技の能力を基底に

\*即興の力…… 説話・歌・楽器・動きなど

\*統合的扱い

- ・遊びと題材曲統合への魅力的な着想・アイディア
- ・歌遊びと楽器遊びの統合
- ・遊戯化、舞踊化など動きへの統合

\*劇化への着眼

以上、幼児期の音楽教育は、正に真のモデルとしての保育者の人格を抜きにしては論じ得ないのである。子供は、歌わないのではなく、歌う喜びを知らされなかったのである。心を結び合う楽器によるリズム遊びの楽しさも知らされなかったのである。

この意味において、問題は、やはり教師論の一点に帰結するのである。その為に、この論が本道に叶った一つの示唆になってくれればと願っている。

## 参考文献

- (1) 武田道子 1984 「子供の生活にみられる音楽的行動」 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第16号
- (2) 武田道子 1996 「現代“ふしことば”論—その教育的意義と楽理的検証—」 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第28号
- (3) 武田道子 1995 「幼児の音楽教育への一考察～自由保育に於ける遊びの分析を手がかりに」 静岡大学研究報告（教科教育学篇）第27号
- (4) 文部省小学校課・幼稚園課編集 1998 「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について（最終報告）」『幼稚園教育年鑑』 東洋館出版

## 参考楽譜

- (1) 飯田秀一・武田道子共篇 1991 『20世紀に翔く子どものうた百科』全音楽譜
- (2) 飯田秀一・武田道子著 1979 『幼児音楽—指導実技篇』同文書院